

市内では1点
県内でも数点

レッツ！謎解き！！考古学

～不思議な形の土器編（吉光谷遺跡^{よしみつだにいせき} 西条町下三永^{さいじょうちょうしもみなが}）～

この2つの土器の破片からどのような形の土器が復元できるか想像してみよう

いったい土器のどの部分に
当たるのかもわからないなあ



ヘラ先を使って線が刻まれ、
下側がふくらんでいるなあ

よく観察してみよう
破片のカーブで土器の大きさや
どの部分が想像できる場合もあるよ

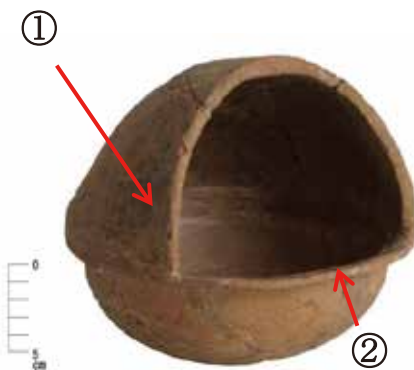
この部分はいねい
なでて面を作っているね

線で木の葉みたいな文様
が描かれているね、文様
の向きはこれでいいのかな？

これは土器の口縁の部分かな
丸いタコの吸盤みたいな文様があるなあ
(竹管文といわれる細い竹の断面を押し付けた文様です)



正解は手焙形土器^{てあぶりがたどき}（その形が手を温める火鉢に似ていることから付けられた名前です）



（参考写真）手焙形土器

大町七九谷遺跡群出土（広島市安佐南区大町）

提供：公益財団法人広島市文化財団

手焙形土器ってどんな土器？

鉢形の土器の上に半ドーム状の覆いをかぶせたような形をした土器で、弥生時代のおわりから古墳時代のはじめにかけてみられます。中国地方から関東地方にかけて分布し、特に近畿地方で多く出土しています。祭祀に使われていた可能性が高いといわれており、吉光谷遺跡でも、手焙形土器が出土した竪穴住居跡からは祭祀に使われる高杯片^{たかつきへん}が多く出土しています。

また、畿内地域からの土器と一緒に出土しており、手焙形土器も同様の地域から運び込まれたと考えられます。

（①②はそれぞれ手焙形土器の矢印の部分にあたると考えられます）



手焙形土器（左端）の使用想像図

東広島市出土文化財管理センター報
東ひろしまの遺跡 Vol. 15

発行日 2025（令和7）年3月31日

発行 東広島市出土文化財管理センター

〒739-2201 東広島市河内町中河内 651 番地 7

TEL: 082-420-7890 FAX: 082-437-0320

編集 東広島市教育委員会生涯学習部文化課

E-Mail hgh207890@city.higashihiroshima.lg.jp

印刷 有限会社アラ・アド

※センター報内の地図はすべて国土交通省国土地理院発行の「電子地形図 25000（オンライン）安芸国分寺周辺遺跡」を加筆、拡大して使用しています。

東ひろしまの遺跡 Vol.15

近現代の銭湯跡を発掘！

よっかいちいせき^{よっかいちいせき} 四日市遺跡（西条岡町）^{さいじょうおかまち}



写真1 建物基礎の検出状況



写真2 煙突基礎

四日市遺跡はテナントビル建設工事に伴い、令和4年10月～12月に民間調査機関により発掘調査が実施されました。調査地点は、近世山陽道（西国街道）から南側に少し離れていましたが、江戸時代の四日市宿^{よっかいちしゆく}に関する遺構が発見されることも期待されました。

調査の結果、銭湯の建物基礎のほか、レンガ造りの窯、煙突の基礎、土管が連結された排水路、コンクリート製の浴槽や洗い場がみつけられました。

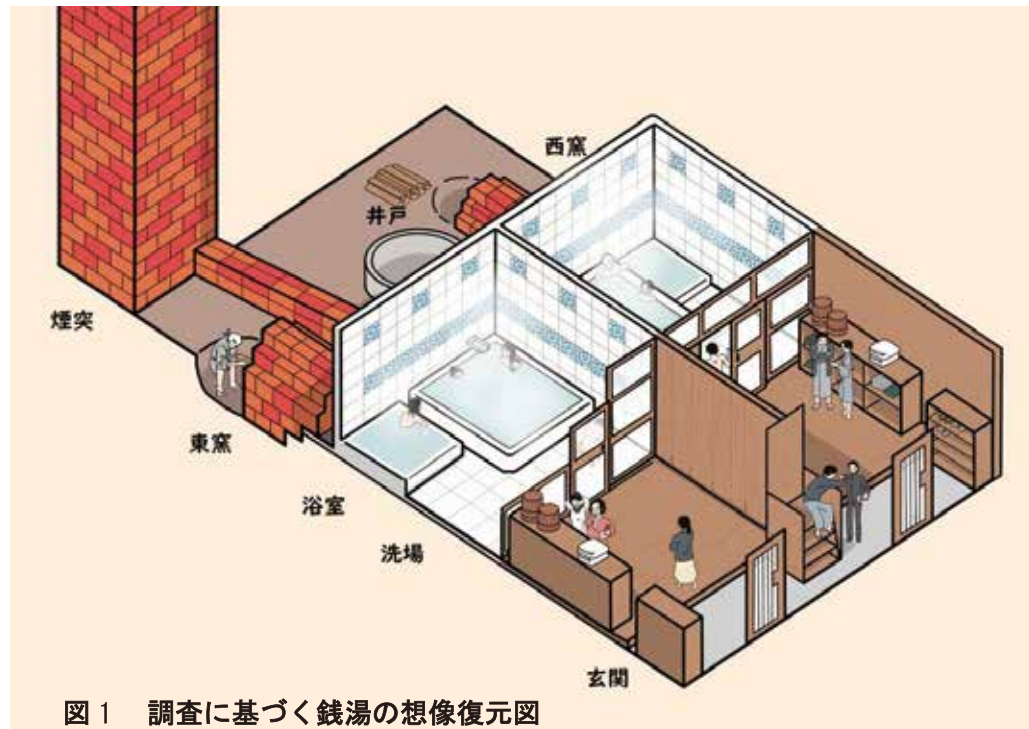


図1 調査に基づく銭湯の想像復元図

かつて西条駅南口周辺には、西側に「都湯」東側に「朝日湯」という銭湯が存在していました。記録によると都湯が昭和24年、朝日湯が昭和28年に営業を開始しています。今回の調査で発見された建物基礎は西条駅の西にあった都湯の一部とみられますが、都湯が提出した「公衆浴場許可申請書」の図面と比べると、浴槽の構造や規模が異なっている部分が多く見つかりました。その中でも発見された煙突と申請書に記載されている煙突は構造も大きさも異なっていました。

木材を燃料とする銭湯では煙突が必須の設備ですが、昭和6年の警察庁の通達では煙突の構造は鉄筋コンクリート製、高さは22.73mと定められていました。ところが今回発見された煙突跡はレンガ製で高さも10m（推定）しかありません。

これらのことから、今回発見された建物基礎は昭和6年より前、書類上の記録のない都湯以前の銭湯（都湯の前身か？）であった可能性があります。

調査にあたって、近隣の方々にお話を聞くと、第二次世界大戦（昭和14年～20年）の頃やそれ以前から、軍人や西条農学校（現在の西条農業高校）の生徒が、調査区域にあった銭湯を利用していたとのことでした。

今回の調査区域では、江戸時代の四日市宿に関連する遺構は確認されませんでしたでしたが、近代の日常生活の一端をうかがえる興味深い発見といえるでしょう。



図2 四日市遺跡位置図（1:7,500）

整理作業の過程で見つかったモノ

よっかいちいせき さいじょうかみいちまち
四日市遺跡（西条上市町）

市道整備事業に伴い平成30年度から継続している発掘調査（『東ひろしまの遺跡 Vol.9』3～4頁参照）は、令和5年度で現地調査が終了し、令和6年度は整理作業を本格的に進めています。

その整理作業の最中、とても珍しい“ヨーロッパ製の硬質陶器”を発見したのでお知らせします。



写真3 四日市遺跡から出土した「ヨーロッパ製の硬質陶器」

口縁部の小片のため「裏印（窯印）」も欠損しており詳細は不明ですが、転写技法（銅版）・胎土・成形方法などから、現在も陶器の名産地であるイギリスのスタッフォードシャー地方の製品と考えられ、時期は19世紀後半とみられます。

器形は「皿」で輪花になっており、口縁裏側には「窯道具痕（ハリ支え跡）」が1か所観察でき、「黒色」のインクで“草花文”が描かれています。

近・現代の遺物を含むゴミ穴から出土しており、昭和に入ってから廃棄されたようです。

実は、過去の調査（西条駅前区画整理事業に係る発掘調査）でヨーロッパ製の硬質陶器が確認されていますが、これはオランダ・マーストリヒトのペトルス・レグー社の製品で、阿蘭陀商館があった出島に荷揚げされたもののでしょうか？

四日市遺跡は近世西国街道沿いの宿場町として栄えました。宿駅の廃止後も政治・行政の中心であるとともに「街」に“商店街”が形成され、人々の往来も多かったはずで、そこには、多彩な商品が流通していたと考えられます。

このような地方都市には、ヨーロッパの陶器は珍しく、魅力的な製品として大切にされていたのでしょう。